昭和八十八年五月　五日（日曜日）　西成なるへそ新聞　第04号(2) ©Ko Yamada & Breaker Project

呉服生地で作務衣創作

控えめ店主の大胆挑戦

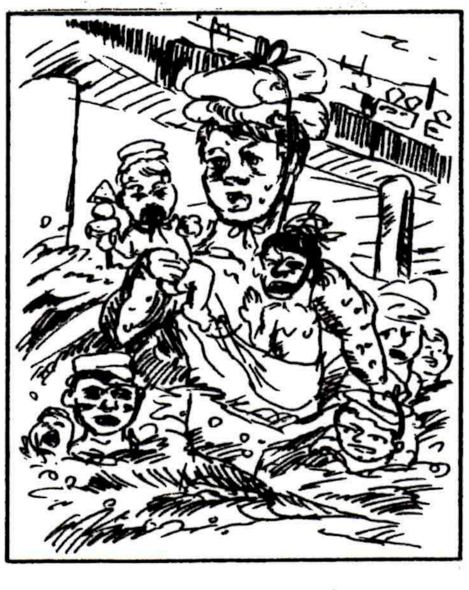
国際展開も視野に

飛田一市（かずいち）さん(69)は商店街で40年以上呉服屋を営んできた。昨今人通りが減って若い人も着物を着なくなった。このままだと家業も先細りになるが、先が細くなるのは針だけでいいと、この度作務衣（さむえ）を専門にした商売を思いついた。作務衣は下がズボンだ。奥さんから和裁を習い覚えた器用な飛田さんは、早速、ズボンを解体して自分で型紙を作り上げミシンも器用に操る。山形から二十歳の時に大阪へ来て以来、古着問屋で働いて着物地の知識を身につけた。同所で奥さんと知り合い、5年後結婚を機に独立して現在の「小福屋」を開いた。奉公先が「大福屋」なのでそれより控えめな名前にしたという。おふくやと読むが皆がこふくやと呼ぶのでそれも受け入れている。1点毎が2つと無いオリジナルになる。新たな挑戦に意欲を燃やす飛田さんである。

九死に一生

しじみ採りに川を横断中

大和川にしじみ採りに出かけた糸賀陽治さん(11)が気づくとチンチン電車は既に川を越えようとしていた。一つ前の駅で下車すれば川口に座礁している潜航艇の残骸の近くのしじみがたくさん採れる場所に近い。七人もの年下の子供達を連れていた陽治さんは遠回りで橋を渡って戻ることを嫌い川を一気に渡ろうとした。浅いとはいえかなりの水の力に危なく流されそうになりながら両手両脇には子供達、頭の上に服をくくりつけ、なんとか対岸まで辿り着き事なきを得た。



「潜航艇はどっちや!」

『必死やった』

陽治さんはその後の会見で「電車代は一律5円で5円あれば関東炊きが食べられるのに勿体ないと、歩いて戻ることを考えたが死ぬかと思った、子供達を守られねばと必死だった」と語る。一方、大浜の海水浴場への電車では大人に混じって改札を抜け5円をごまかし関東炊きを買おうとする小学生が後をたたず、対策が急がれている。

社説

知恵を共有し街を共に生きる

日本には「敬老の日」という立派な記念日があるが、もともと兵庫県のある村の村長と助役が「老人を大切にし、年寄りの知恵を借りて村作りをしよう」という発想から農閑期に「としよりの日」という日を設定したものが全国に拡がったのだという。今ではすっかり形骸化してただ祝日だとか、祖父母にプレゼントをする日のような認識でいる場合も多い。本来の目的である「知恵を借りて村作り」という部分が消えてしまっているのだ。

お年寄り達には長い時を過ごしたからこそ得られる「知恵」がある。一年に一日だけ優しくするばかりが敬老ではなく、日頃から思い出話や知識に耳を傾け、その個人的な歴史体験の中から、これからの我々がどのように生きて行けば良いのかのヒントをつかむ事こそが正しい意味での敬老なのだろう。西成での地道な試みである「なるへそ新聞」が暮らしの中で昔の話を聞いていくことを日常化し、一緒に街を生きる事が出来ればと願っている。

●求人廣告●

新聞記者 西成なるへそ

男女問はず・経験不問 常時

山王一の五の三一 新福寿荘内

ブレーカープロジェクト

（電話）〇七〇・五〇四六・八六六七

夜中の餅つき

～家族思い決行～

歳末の書き入れ時を迎えた飛田本通商店街は、多くの客で賑わう。紳士用の帽子を販売する「ニューペロア堂」は、一日最高で百五十個の帽子を売り上げる盛況ぶり。店主の古川塩八さん(42)は「商売人は他人が遊んでる時に仕事をするもんや」と普段から小学生の息子晶弘さん(11)に語り、盆も正月も店を開けていた。しかし今年は普段年末らしい行事を経験していない家族を思い、餅つきをと決断。閉店後の午後十時過ぎ頃からペッタンペッタンと餅つき大会が始まった。仕事後の餅つきは体に堪えた様子で、「家族は喜んだがもうこりごり」と塩八さんは話す。

黒田さん新作に期待

自費出版で一〇〇部発行し、阿倍野の書店でベストセラーとなった同人誌「風車」の著者・黒田信子氏の新連載が始まる。詩的な文体で西成の風景を描き出す黒田氏の待望の新作を依頼執筆中。

■黒田信子（くろだのぶこ）鹿児島市生まれ。生家の近くに住んでいたNHK作家宮川一郎氏の縁で大阪NHKでレポーターとして勤務。その後昭和44年に同人誌「風車」第一号発刊。昭和48年まで六号発行した。

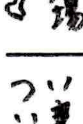
タコに吸い寄せられて♥

新開筋商店街にある衣料雑貨店が、先ごろ淡路島の五色町から可愛らしいお嫁さんを迎えた。このたびの慶事はタコが結んだ縁だという。瀬戸内海で獲れたタコは戦中戦後は疎開や買い出しで大阪から淡路島へ渡る人も多く、新婦の父下野勝郎さんはそのような人たちを厚くもてなした。あるとき獲れたばかりのタコを差し入れたところ、これがたいそう美味しいと、以来毎年のようにやって来るようになった人があった。愛娘が大阪に嫁ぐことになって、その人の力添えもあり、紅白の幕を掛けた立派な嫁入り道具まで誂えたという次第。「派手なこともなくごく普通」と控えめに語る若い二人で、これから店を盛り立てていく。

異人の墓で夕涼み

野球小僧の夏の楽しみ

金塚小学校の裏は粘土山と呼ばれる赤土の高台で異人墓地と広場になっている。普段は俵田の壁に軟式ボールをあてて練習しているが、皆でとなると「異人墓地いくぞ」と声をかけ広場に行く。



ピッチャーの長野君や外野手のしげ君(10)は平たくて上が少し丸い異人さんの墓が、どこの国の墓なのか不思議に思いながらも、暑い季節の夕方に少し冷えた墓石が野球をしたあとの火照った顔にひんやりと気持ちがよく、つい寄って墓石に抱きついて楽しんでいる。

秋葉忠太郎の百年目の新連載

（一面八段）

河原嘉子（実娘）

8文字熟語のスタートです。新聞を読む、いろんな物を見る、人との出会い、三度の食事、その他、いろんな方面から思うがまゝに8文字熟語に書いています。これからも続くでしょう。お楽しみに

【文化】オーエス劇記

山王には大衆演芸場がある。昭和年代後期のまさに演芸資料の地にふさわしい所でもある。演題は「恍惚劇」「博多人形」「女形芝居」「意知悪婆さん」。そして拉致を題材とした「拉致、母千里」等。特筆すべきは「意知悪婆さん」であろう。下達ものとはいえ現代にもマッチするエピソードを交えた巧妙な芝居であり、嫁と姑のペーソスは見事である。加えて劇中での姑の役者沢田ひろしの奮闘振りを表現する時のタオルを固く巻き、一気にハチマキにする時の鮮やかさ、さすが幼い時から鍛えられた役者魂そのものの仕草である。要は姑が嫁に何を訴えているのか観る人に考えさせる妙がある。そして「女形芝居」これも圧巻である。衣裳といい化粧といい又扇子のなんと上手く操ること。そして身の熟し方。唖然とする。「女でもこんな綺麗な人いないで」といった男がいたが、ほんとにそう思った。しかしそうでない人もいる。いわゆる白けが気になる人、これも又大衆演芸の神髄かなと思う。（永岡芳弘）

創造活動拠点

新福寿荘 若手のアーティストやクリエイターの入居者募集中

詳しくはBreaker Project ☎070-5046-8667

ニュー 帽子専科 ペロア堂

山王一丁目16-13

社会福祉法人 山王みどり会

山王1-6-5

WINE
SAKE
BEER
WHISKY

全酒類 食品販売

柳本商店

山王1丁目21番4号